

## 追尾士の捕鯨記録

北海道網走市，昭和46～47年の小型沿岸捕鯨

Whaling Records of Trackers :  
Small-scale Coastal Whaling of Abashiri City, Hokkaido, from 1971 to 1972  
KAWASHIMA Syuichi

川島秀一

### はじめに

昭和29(1954)年8月21日，宮城県の鮎川（現石巻市牡鹿町）の「鯨博物館」の開館式の祝辞で，渋沢敬三は「鯨の首」とでも題が付けられるような話をした。鯨の首はその所在がはっきりしないので，すばやく，かつ完全に「血ぬき」をすることが無理である。「鯨の肉」はそのために早く血ぐされ気味になり，味が変わりやすいという主旨から展開した祝辞であったという<sup>(1)</sup>。

この祝辞の記憶をあえて記した竹内利美は，漁港には「漁場性漁港」と「市場性漁港」という二つの型があり，一般的には市場の便に即して近代漁港は発達するのが本筋であるが，捕鯨基地だけはたった一つの例外であったと述べている。つまり，「鯨の処理は捕えた後，なるべく速く行なう」<sup>(2)</sup>必要がある，第一丸のままの巨体では，運ぶにも厄介だし，市場にも出せない。だから，近海捕鯨では，漁場になるべく近い場所に，処理場を設けねばならないし，遠洋では「海上の工場」としての母船が，ぜひ必要となるのである<sup>(3)</sup>という。

これは，現在も行なわれている小型沿岸捕鯨の基地の，地理上の位置を見ただけで一目瞭然である。青函トンネルのできた後の函館を例外として，鮎川を初めとして，網走（北海道網走市）・和田（千葉県南房総市）・太地（和歌山県太地町）は，いずれも陸路で行くには不便なところである。

筆者はかつて，そのことを踏まえて，捕鯨基地を消費地に近い「漁港都市」としてよりは，外洋に面した「漁村」の特質を多分に抱え込んでいる港町として捉えるべきことを述べ，さらに捕鯨業を「漁業」として，それに関わる人間も「漁師」として捉えていく視点も必要であることを述べたことがある。たとえば，鮎川では，春のメロウド（コウナゴ）のすくい網漁が盛んな時期は，メロウドを捕食するミンククジラを捕獲する。また夏のイカ釣り漁のときには，イカを捕食するツチクジラを捕獲していた。つまり，鮎川の年間の漁業暦に沿うような操業をしていたのである。太地では，小型沿岸捕鯨を操業する同じ船が，4月上旬まで太地沖でサンマ流し網をしていた例もある<sup>(3)</sup>。近代捕鯨やそれに関わる者たちは，特殊な職種や職能者ではなく，この列島の伝統的な漁法や，漁船の慣行を踏襲していたのである。

特に現在の小型沿岸捕鯨の場合は，4艘しか存続していない。この列島の全乗組員数を合わせて

も 40 人にも満たない。1 艘には 3～8 人しか乗船しておらず、少なくとも 10 人前後は乗船するカツオ一本釣り船の比ではない。そもそも小型沿岸捕鯨の「小型」とは、クジラを指すのではなく、50 トン未満の「小型捕鯨船」のことを指している。口径 50 ミリメートルの捕鯨砲を積んでいることが、外観的に通常の漁船とは相違するが、そこに見られる民俗的な事象は変わらない。

本稿でも、その「漁業」としての捕鯨業、「漁船」としての捕鯨船、「漁師」としての捕鯨従事者の姿を浮き出させるために、北海道網走市の小型沿岸捕鯨を対象とする。特に長いあいだ、小型沿岸捕鯨の甲板員をしていた福岡昇三さん（昭和 12 年生まれ）が、昭和 46（1971）年と昭和 47（1972）年の兩年にわたって、漁期のあいだ書き記したノートをもとに、捕鯨の実態を再現してみたい。

ただし、その記録ノートを研究の利用に供するだけでなく、書き手である福岡さん自身が、どのような契機で書き始め、どのような項目を選んで書き記し、書くことで操業がどのように変わったのかなど、書き手の側からの捉え方も併せて考えてみたいと思っている。

## 網走の近代捕鯨

北海道網走市で近代捕鯨が始まったのは大正 4（1915）年のときである。東洋捕鯨会社がタンネシラリ（ニツ岩裏）に事業所を設置し、オホーツク海捕鯨を始めた。翌年には、100 日間でナガスクジラ 127 頭、ザトウクジラ 131 頭を捕獲しているが、大正 8（1919）年には、東洋捕鯨会社は本拠地を根室市に移している。

その後、昭和 6（1931）年に、東洋捕鯨の後身である日本捕鯨が網走の築港埋立地に工場を移し、捕鯨を再開したが、捕獲頭数が激減したので、昭和 10（1935）年に再び中止、第 2 次世界大戦中の食糧増産と皮革資源の増産のために、再々開したのは昭和 15（1940）年のことである。

戦後の昭和 25（1950）年が網走の捕鯨が盛況を極めたところで、3 社 7 隻までになる。このとき 7 隻の大型捕鯨船に対して小型捕鯨船も 7 隻が機動している。しかし、昭和 30（1955）年には、日本水産（日本捕鯨の後身）が資源枯渇などの理由で撤退し、その他の大型捕鯨会社が網走市からすべて撤退するのは昭和 37（1962）年のことである。

その後、IWC（国際捕鯨委員会）が商業捕鯨モラトリアムを採択した 5 年後の昭和 62（1987）年、網走の小型沿岸捕鯨は終焉を迎えた。<sup>(4)</sup>

この 100 年の網走の近代捕鯨史を振り返るだけでも、何度も盛衰を繰り返し、国際的な政治状況に振り回されてきたことがわかるが、網走が日本有数の捕鯨の町であったことは確かなことである。

2012 年現在では、ツチクジラの調査兼商業捕鯨として、共同操業の第 7 勝丸と第 28 大勝丸とが、それぞれ 2 頭ずつ、合計 4 頭のクジラが上がるだけの捕鯨基

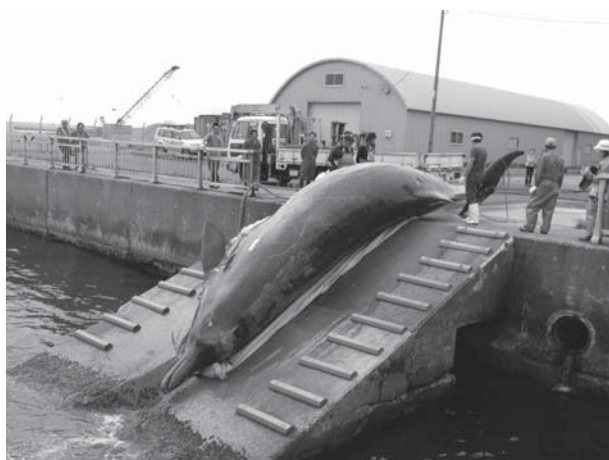


写真1 網走に水揚げされるツチクジラ  
(2012 年 8 月 23 日撮影)

地になっている（写真1）。

ここで小型沿岸捕鯨の砲手のことに触れておくが、同じ砲手でも、クジラの種類によって、得手と不得手がある。近代捕鯨とはいえ、まだまだ人間そのものによって左右されていた世界であった。たとえば、網走で「ミンクの神様」と呼ばれた前田熊雄さん（大正2年生まれ）は、ツチクジラよりはミンククジラを捕るのが上手な砲手であった。「クマさん」という愛称で呼ばれていた前田さんは、多くの捕鯨従事者を輩出した五島列島の有川の出身で、十代で南氷洋捕鯨へ行き、予備砲手にまでなったが、喘息を患ってから小型沿岸捕鯨に切り替えたという。「振り回しが上手なクマさん」とも呼ばれ、ミンククジラが海底に潜ったのを見てから、次に浮上するところを勘だけを頼りに、捕鯨砲を右に左に振り回しながら、狙いを定め、その命中率が高かった。

前田熊雄さんの子の三郎さん（昭和23年生まれ）から見た父親は、捕鯨をスポーツのように楽しんでいて、クジラが発見されると、砲台の上で小躍りして喜んだという。スポーツシューズを履き、銜え煙草で捕鯨砲を撃ったという。<sup>(5)</sup>

福岡昇三さんは、昭和30（1955）年から久保田勝雄さんという砲手に仕え、久保田さんがその後南氷洋捕鯨に行き、帰ってきてからも同じ船に頼まれて乗っている。福岡さんによると、前田さんはオカへ向かってクジラを探す人であり、久保田さんは沖へ沖へとクジラを探す人であったという。<sup>(6)</sup> 福岡さんは、砲手の久保田さんの勧誘によって、小型沿岸捕鯨船に乗り続けたといっても過言ではない（写真2）。



写真2 網走港の銀星丸の上で（福岡昇三氏所蔵）  
右端が福岡さん、中央が久保田砲手

## 福岡昇三さんのこと

福岡昇三さんは、昭和12（1937）年5月20日、北海道網走市南1条東1丁目2番地に、父・由太郎と母・きよの11人兄弟の四男として生まれている。父は通称「橋の下」（福岡さんの本籍と同じ）で馬車追（運送業）の仕事をしていた。そこには、第1・第3・第6・第7豊洋丸や北洋丸などの多くの小型沿岸捕鯨船が着岸していた。福岡さんは、小学生のころから、これらの船に乗せられた。一度捕鯨船に乗せたときにクジラが捕れたので、それからは「マン（漁運）がいい子」として、好んで乗せられたからだという。捕鯨船に乗せられると、砲手から「お前、どっちに行きたいんだ？」と訊ねられ、一種の占いのようなこともさせられた。長じてから、父の運送業を継がずに、海が好きで捕鯨船に乗ることになった一番の理由である。

昭和28（1953）年3月20日の、中学校の卒業式を待たずに、鮎川へ行った。鮎川の沿岸捕鯨船、渡島丸（船主は阿部三郎兵衛）に乗船するため、中学校では「職場第1号」と呼ばれた。福岡さんは、卒業式の当日には鮎川へ行くために船に乗って函館におり、今頃は故郷で仲間が卒業式を受けているなあと感慨深くなったことを今でも覚えているという。彼にとっては、生涯忘れられない

日となった。当時は捕鯨船の乗組員が不足していたため、函館からは「しょっぱい川」(津軽海峡)を渡り、陸路を用いて2日くらいかけて鮎川に着いた。

その当時、網走からは鮎川に10人くらい行っており、砲手は戸田さんという網走出身であり、福岡さんが幼いころに捕鯨船に乗せてもらった船の砲手だった人である。乗組員は8~9人で、9人の場合は、船長・砲手(テッポウさん)・機関長・甲板長・一等セーラー・二等セーラー・三等セーラー・チョウバ(帳場)・メシタキ(カシキ)などと呼ばれて、それぞれの役割があった。砲手の給料の割り当てが多く、砲手が網走に戻るときは、リュックサックにお札を入れて帰ってくると言われていた。福岡さんの最初の仕事は、他の漁船と同様にカシキであった。

鮎川の当時の操業期間は、2月末か3月が漁期の始まりで、5~6月がミンククジラを捕り、その後北海道へ渡った。8月に鮎川に戻ってから10月まではツチクジラを捕って終了した。漁場は船によって相違していたが、渡波沖から網地島・田代島を回っていく船と、直接に金華山へと向かう船とがあった。

金華山に初めて上陸するときに、先輩たちから注意すべきこととして、次のような話を伝えられたという。金華山にいるサルは昆布を干していること、サルは葡萄酒も製造しており、その葡萄酒を見つけて飲んだ者がサルたちに袋叩きにあったこと、金華山から離れたシカは、神様を見捨てたと同然なので捕獲してもよいことなど、カシキのような年少者をからかうような、真偽の定かでない話を教えられたという。

福岡さんは、鮎川に行ってから驚いたことが二つあった。一つは、「餅売り」と呼ばれていた娼婦であった。カシキは他の乗組員がオカ(陸)に遊びに行ったり宿泊していても、船で泊まる「船当番」をするものであるが、ある夜、実際にアンコロ餅を持った女性が船にやってきて「兄さん、餅買ってくれ」と言いに来たという。もう一つは、朝方に漁場に向かう船尾の上でご飯の仕度をしているときに、いきなりトビウオの群れが船に飛び込んできたという。網走では見たことのない生物にびっくりして怖れたが、それが魚だと教えられて、2度びっくりしたものだという。

カシキの時代には、砲手から石巻港の岸壁に呼び出され、「ノース!」と砲手が言えば、反対の方角の「サウス!」などと応える訓練を受け、うまく応えられなかったという。船上では舵を扱う者に対しては、すぐにでも英語や海軍用語で対応しなければならなかったからである。ただし、砲手に対しては、「右」や「左」のことを、日本語で対応している。また、カシキの時代に、クジラが百間ほど先の海面に現れたときは、片手を伸ばして拳を握り、クジラに焦点を定めてから、クジラが潜れば、その拳を越えたところの先に再び浮上することなどを教えられた。

カシキの時代は厳しいものであったが、オヤカタ(船主)のオオオバ(祖母)は綽名が「マッカッサー」とも言われるくらい発言権のあった女性で、福岡さんは彼女に「ショウコちゃん」と呼ばれて、たいへんかわいがられ、誰よりも早く「風呂沸いているから入らんか」と言われたという。

大漁のときや、あるいは逆に不漁のときは、船上で酒を飲む機会があるが、そのときはカシキが、一番先に大砲にお神酒を注ぎ、次にオフナダマが祀られているタツ、それからトリカジ(左舷)回りに、船縁に注いであるいたという。他の漁船と相違して、タツより先に捕鯨砲に酒を注ぐことは、捕鯨船特有の民俗と思われる。ただし、不漁のときには、コヅチ(木のハンマー)で「(漁を)お願いします」と言いながら、タツをたたいたという。クジラを捕獲するたびに、そのオバ(尾羽)



を少し切ってからタツに上げるのもカシキの役割であった。

福岡さんは、1年半後、網走に戻っている。久保田勝雄さんが釧路船籍の捕鯨船の砲手になったことを機縁に、網走を本拠地とする北洋丸（安藤捕鯨）という小型沿岸捕鯨船に乗ることになった。久保田砲手は、福岡さんより10歳くらい年上で、網走の「橋の下」で、よく福岡さんを見かけていたという。

漁期は網走の水が開ける3月ころから、流水が来る12月まで操業した。ミンククジラ・ツチクジラのほかにも、ナガスクジラの仔やシャチも捕った。シャチの肉は固く、昭和40年代に入ると食べる者はなくなった。シャチ8頭1家族を同時に捕ったこともある。メスを捕るとオスも子も逃げず、非常に親子愛の強い生物だと思ったという。

その後、玉丸（釧路）、喜宝丸（釧路）、安丸（網走）、銀星丸（網走）、寿丸（網走）と小型沿岸捕鯨船の甲板員として乗継ぎ、昭和49年（1974）の寿丸を最後に、捕鯨船から下りている。ただし、捕鯨船の合間や捕鯨船を下りた後にも、底曳網船などの漁船に乗り継いで今にいたっている。

## 福岡さんの「捕鯨記録」

福岡昇三さんの捕鯨記録は、昭和46（1971）年と昭和47（1972）年の分が一冊のノート（A5判）に残されている（以下「ノート」と称する）。その後も、捕鯨船から下りるまで書き続けたというが、現存していない。

1頁から15頁までが昭和46年分、16頁から26頁までが昭和47年分である。その後の30頁から32頁までが、昭和47年分のガソリンの数量、34頁には火薬詰の数量が記されている。

記録する契機となったのは、銀星丸に乗ってからは、ボートを用いる捕鯨方法に変わりつつある時代で、その追尾士としてボートの燃料費がどのくらいかかるのか、全体の消費額によるリスクをはかる上でメモを取り始めたことにある。また、福岡さんは追尾士とともに解剖士でもあり、クジラがどのような生物を食べているか（捕鯨船員は「餌」と呼んでいる）、今後の漁場を見定める上で、この項目を書き始めたことも一因だという。ノートは、操業後の帰港を目ざしている船の中で寝転がったのメモで埋められている（写真3）。

記録されている時代は、網走で大型捕鯨船が撤退した後の、ある意味で小型沿岸捕鯨の全盛時代であったともいえる。特にこの時期は、操業と解剖に関して、大きな変化が生じている。

操業に関しては、小型ボートを用いてのクジラのオッカケ（追いかけ）を行ない始めたことである。解剖に関しては、昭和46～47年ころからクジラの船内解剖が正式に許可されたことである（写真4）。

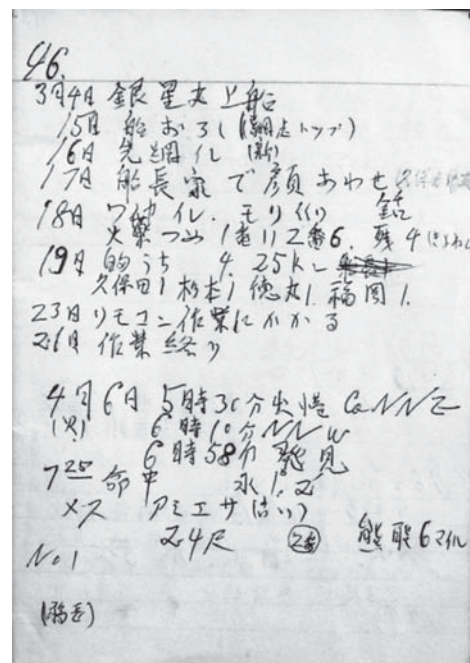


写真3 福岡さんのノートの最初のページ  
4月6日以降、このような様式で捕鯨記録が続く

オッカケという、ボートを用いての捕鯨方法は、昭和46（1971）年に宮城県の鮎川で始まったというが、翌年、またたくまに、網走のほとんどの小型沿岸捕鯨船でその方法を用いるようになった。ボートの大きさは、大型捕鯨船に対するキャッチャーボートのような比率であるが、捕鯨砲を積んでいるわけではない。船外機の高速エンジンの音でクジラを追い、本船から撃ちやすいところへクジラを回すのがねらいである（写真5）。この方法を用いてから、クジラを発見してからの捕獲率が、60～90%に飛躍した。

クジラを撃ちやすいところとは、一般的に、クジラと捕鯨船がカタカナの「イ」の字のかたちを持っていくとよいと言われている。クジラは捕鯨船に対して尻を向ける確率が高いが、尻から撃つと頭へ砲弾が抜け、火薬が爆発して肉のほとんどが焼けてしまい、使い物にならなくなる。かといって真横から撃つと、心臓に当たる確率が少なくなり、頭に当たれば、暴れ始めて捕獲に手間取るという欠点があるからである。<sup>(7)</sup>福岡さんによると、オッカケによって、クジラを捕鯨船の右舷側から捕鯨砲のある船首に向かわせるという。つまり「イ」の字を左右にひっくり返したかたちを理想とした。もちろん、このオッカケによる捕鯨法に変わると、先に述べたような、拳を用いて、クジラが次に浮上する位置を定めることは、捕鯨船でもボートでも用いられなくなった。オッカケをしているときにクジラが潜らないこともないが、スピードの出ているボートの上では、その方法を用いる時間的な余裕さえなくなったという。

さて、前田三郎さんも、若いころ、兄の代わりにボートに乗り、クジラにぶつかってひっくり返ったことがあった。ボートが出始めたころは、16フィートの65馬力のエンジンで、70～80キロは出た。三郎さんは、後に伴侶となる彼女をボートに寄せ、網走川を上下に走り回り、得意になって網走橋の下をくぐったものだという。

オッカケは、長く乗り続けると胃下垂や腰痛になるくらいの激務である。後には「ボート手当」と言われる特別の報酬が出されるようになったが、それまでの砲手の位置を微妙に抜くようなことがあって、給料の調整が難しかったという。ちなみに「ボート手当」（追尾料）が2,000円のとき、



写真4 クジラの船内解剖  
後方の山々が知床半島（佐々木常生撮影）



写真5 網走では昭和47年から船外機付きのボート（写真左）でミンククジラを追いかけるようになった  
（前田三郎氏所蔵）

他の特別手当は「解剖料」が同じく 2,000 円、クジラの「発見料」は 1,000 円であった。その後、「ボート手当」が 3,000 円、「解剖料」が 3,000 円、「発見料」が 2,000 円になっていった。

オッカケをする者のことを「追尾士」あるいは「追鯨士」とも呼ぶが、福岡昇三さんはその追尾士を長年にわたって行なってきた。オッカケをするボートは、90 馬力の船外機の付いた高速エンジンで、70 キロのスピードを出すことができた。福岡さんによると、ボートを使うようになってから、クジラを発見して早くも 5 分、かかっても 15 分で仕留めることができるようになったという。それ以前に比べると、倍以上ものクジラが捕れるようになった。特にトウバンクジラとも呼ばれる、その海域だけに棲んでいる大きなクジラは、ボートで追いかけているうちに跳べなくなり、逃げ切れなくなるのが早い。クジラを追い詰めると、パンコロ（一発で仕留めること）までは、いっときだったという。トウバンクジラとは、その漁場での親分のような存在の大きなクジラのことを指す。斜里沖、止別沖、北浜沖などには必ず一頭がいたという。

福岡さんのノートは、ちょうどこのオッカケを試みる前の昭和 46 年と、初めて試みた昭和 47 年が記されていて、その意味でも貴重な記録になっている。昭和 46 年に鮎川でオッカケが始まったので、翌年に久保田砲手が船主（社長）にボートを用いる試みをお願いしたという。

ところで、網走の小型沿岸捕鯨の漁期は、前述したように基本的には網走沖の流水が去っていくところが捕鯨の始まりであり、流水が来れば止めざるを得なかった。捕鯨はオホーツク海が開けている限られた時期の漁だったのである。

福岡さんの「船員手帳」の昭和 46 年分を見ると、第 2 銀星丸は同年の 4 月 5 日から始まり 11 月 30 日に終えている（写真 6）。福岡さんはその後すぐに、12 月 1 日から翌年の 1 月 31 日まで、第 21 大平丸という底曳網船に甲板員として乗船している。昭和 47 年の第 2 銀星丸の漁期は 3 月 16 日から 12 月 11 日までである。

ところが、福岡さんのノートは、昭和 46 年の 3 月 4 日から始まっている。実際の操業記録は、4 月 6 日から 10 月 21 日までであるが、操業までの準備作業などが記されている。たとえば、その年網走で一番早く行なった船おろし（3 月 15 日）、先綱（捕鯨鉤に結ばれている綱）入れ（3 月 16 日）、ワイヤー入れ・鉤くり・火薬詰め（3 月 18 日）、的撃ち（3 月 19 日）などである。

的撃ちは、捕鯨砲の試験撃ちであり、25 間も離れている木の箱などを海に浮かべて撃ってみる作業である。砲手の久保田さんだけでなく、杉本友一さん・徳丸岩男さん・福岡さん自身も撃ち、砲手が捕鯨砲の調子を外側から観察する機会である。

3 月 16 日には船長家（久保田家）で「顔合わせ」を行なっているが、この当時、乗組員は 8 名であった。砲手兼船長が久保田さん、機関長兼無線士が杉本さん、甲板長が徳丸さん、追尾士兼解剖士が福岡さん、3 等セーラーが岩森さん以下 2 名、メシタキが 1 人であった。例外的な

(五) 雇 入 契 約 関 係			
船 名	丸	総 ト ン 数	22.5 / G.T.
Name of Ship	第 2 銀星丸	主 機 の 種 類	ディーゼル
職 務	甲板員	航 行 区 域 又 は 従 業 制 限	オホーツク
Position	北海道 網走市 南 7 条 西 1 丁目 王 寺 五 郎 幸	年 令 18 年 に 達 する 日	年 月 日
船 舶 所 有 者 の 住 所 及 び 氏 名 又 は 名 称	船 長 氏 名 (印) 久保田勝雄 (印)		
雇 入 期 間	下 定		
雇 入 年 月 日 及 び 雇 入 港	昭和 46 年 4 月 5 日 網走 港		
備 考	網走出陣所 16.4.5.		

写真 6 福岡さんの昭和 46 年記入の船員手帳



---

ことだが、この兩年には、銀星丸の船主である、三好石喜さんも乗船している。

昭和47年の記録は、準備のことまで記入しておらず、4月3日から10月1日までが実際の操業期間である。

また、福岡さんのノートには、多少の前後はあるものの、およそ次のような順番で、その日の捕鯨の項目を書いている。すなわち、(1) クジラの発見時刻、(2) 命中時刻、(3) 発見者、(4) 鰯数、(5) クジラの体長(尺)、(6) 性別、(7) 種別、(8) 餌、(9) 捕獲場所、(10) 捕獲場所の水温、(11) 漁期の捕獲順番などである。これらを一覧したのが表1(昭和46年分)と表2(昭和47年分)である。

次に、この一覧表(141~142頁)に基づきながら、各項目について詳しく検討してみたい。

## クジラの発見者と追尾時間

はじめに、クジラの発見時刻であるが、一般的には、クジラも他の魚類と同様に、朝と夕に食餌をするために海面に上がってくる確率が高いといわれる。昭和46年において、各時間帯で5回以上の発見時刻を表から数えると、6時台が6回、7時台が5回、13時台が5回であった。昭和47年には、5時台が5回、6時台が7回、13時台が9回であった。3~4月から10月までの季節による日の出と日の入りの時間にもよるが、おおむね朝方と13時ころに集中していたようである。

クジラを発見することを「探鯨」と呼ぶが、先に紹介した前田三郎さんによると、クジラの発見料は、捕獲した場合にのみ、5,000円をいただいた時代があり、競ってガンキョウ(双眼鏡)を首にかけてクジラを探した。「トリマワリがいいところ」といわれる、海鳥が空を回りながら海面に急降下している群れのところを探したという。そこにはオキアミが真っ赤になっていて、クジラがよく発見された。

「発見料」は先に声を発した者の権利になるので、三郎さんは、よくわからない影が海面に見えただけでも声を発したという。もちろん、このような行為は発見者としての信用にもつながるので、何度もできることではない。しかし、朝の4時に出港して、夏は午後の8時ころに、網走市の通称「クジラ浜」に帰港するまでの長い操業時間である。何度も睡魔が去来した。

目を開いて立っていると思っても、突然ガクンと膝が折れる。三郎さんは、そのようなときに、すぐに後ろを振り返って、乗船していた父親の前田熊雄砲手が自分の失態を見ていたかどうかを確かめたものだという。眠いのを我慢するのが商売だと思ったという。眠るのが上手な者は、トッブマストの上でも落ちずに見ていた。福岡さんも、眠いときは片目を半分ずつ交替に閉じて、目を休ませ、目薬をさしたものだだったという。

福岡さんのノートによる昭和46年の発見者は、46頭の捕獲数のうち、砲手の久保田さんが4回、機関長兼無線士の杉本さんが3回、甲板長の徳丸さんが6回、追尾士兼解剖士の福岡さんが6回、3等セーラーの岩森さんが4回、船主の三好さんが6回、おそらく3等セーラーと思われるが井上さん(ノートには「井」とのみ記されている)1回であった。「共同」と記入しているのは、皆が同時に発見したものではなく、たとえば2頭目を探すときに1頭目の解剖作業をするなど、何名かが船上で作業をしなければならないときには、クジラを発見する機会が平等ではないために、発見料を最初から均等割りしたときに書かれたものである。「共同」と書かれているのは3頭あり、発見者の無記入の日も「共同」と捉えらるとなると、この13頭も含めて16頭となる。

---



表1 福岡昇三航海記録(1971年)

日 時	発見時刻	命中時刻	発見者	銛数	体(尺)	性別	種別	餌	捕獲場所	水温	No.
3月 4日	銀星丸上(乗) 船										
3月15日	船おろし(網走トップ)										
3月16日	先綱イレ(新)										
3月17日	船長家で顔あわせ(久保田勝雄)										
3月18日	ワイヤイレ、モリ(銛)くくり。火薬つめ 1番11 2番6 残4(きょねん)										
3月19日	的うち4.25k。久保田1、杉本1、徳丸1、福岡1										
3月23日	リモコン作業にかかる										
3月26日	作業終了										
4月 6日	6:58	7:25		2番	24	メス		アミエサ	能取6マイル	1.2	1
4月12日	15:10	15:25	三好	2番	21	メス		コナゴ・アミ	能取9マイル	0.8	2
4月14日			岩森		20	メス	トタン系	アミ(古)	能取19マイル	1.2	3
4月16日	9:30	10:20	久保田		23	メス		アミ(新)		0.5	4
4月17日	5時出港、9時15分W風強く漂泊13時30分探鯨、15時15分発見するも16時00分流水のため見失う(チャンス3度あった)										
4月21日	網走—ラウス 喜宝丸1捕獲24尺、本船赤ハゲ投錨17時										
4月22日	SW風強くラウス帰港、入港8時										
4月23日	休漁										
4月24日	13:15	14:25	三好	1番	22	メス	トタン系	アミ		2	5
4月25日	ラウス3時30分ころ出港するも途中2本見るも見込なく、吹雪のため標津入港八時										
4月26日	5:50	6:40	岩森	1番	25	メス	トタン系	アミ(古)		2	6
5月 9日	13:15	14:20	岩森	1番	19	メス	トタン系	スケソウ	16マイル	2	7
5月16日	15:50	16:10	三好	2番	22	メス	トタン系	アミ		5.8	8
5月19日	3:30	5:40		1番	21	メス				6	9
5月20日	10:50	12:30	岩森	2番	29	メス(子モチ)	トタン系	コナゴ(古)	知床SEIE11M	6	10
5月24日	6:30	6:40	福岡	1番	20	オス	トタン系	アミ(新)	能取NE9M	4	11
5月27日	5:30	5:55		1番	17	オス	トタン系	スケソウ		4.5	12
5月28日	9:10	10:20	徳丸	2番	25	メス	トタン系	アミ	C oise NNE	3.8	13
6月 1日	6:40	8:50	徳丸	1番	21	オス	トタン系	アミ	能取21マイル		14
同	10:50	13:15	徳丸	1番	25	メス	トタン系	アミ			15
6月 9日	4:00	6:00	杉本	1番	17	メス		アミ	紋別NE17.22M	8	16
6月10日	11:30	12:00		1番	18	オス	トタン系	アミ	能取N1W34M	8.6	17
6月15日	5:30	7:50	杉本	2番	20	メス		アミ	N18M	8.4	18
同	11:30	12:45	杉本	1番	23	オス		アミ	N30M	8	19
同	13:30	13:35	(共同)	1番	20	メス		アミ			20
6月17日	9:15	12:06	三好	1番	20	オス		コナゴ(新)・アミ(古)	網走NNE17M	8	21
6月20日	13:00	13:05		1番	18	メス		アミ(古)	能取N1W3M	10	22
6月22日	14:20	14:25	井	1番	23	メス		アミ(古)	紋別NEIN25	13	23
6月23日	6:25	7:45	徳丸	1番	23	オス	トタン系	アミ(古)	紋別NE26M	12	24
6月24日	7:20	7:25	三好	1番	23	オス	トタン系	アミ(古)		12.5	25
6月27日	12時5分植鯨不命中										
7月 2日	7時30分発見、8時30分不命中。喜宝丸2本、大勝丸3本、高栄丸3本。能取N I E W23M										
7月 8日	7:55	8:10	福岡	1番	23	オス		アミ	能取N40M	11	26
7月22日	6:25	7:08	福岡	1番	15	オス			網走E1S18M	14	27
7月25日	8:15	8:50	三好	1番	19	オス	トタン系	アミ(新)	網走17M	14	28
7月30日	14:15	15:00	久保田	1番	23	オス		スケソウ	大黒島SIW13M	14	29
7月31日	16:00	18:25	徳丸	2番	24	メス	トタン系	サバ・スケソウ・キンマ	大黒島SIW12M	12	30
8月22日	8:15	8:30	久保田	1番		オス	トタン系	スケソウ(古)	網走ENE30M	16	31
8月24日	11:00	11:15	徳丸	1番	24	メス	トタン系	スケソウ(古)	網走NEE60M	14	32
同	ほかに1頭作業終るまで船についていたが、追尾するもF(霧)のため見失う										
8月25日	7:00	7:30		1番	24	オス	トタン系	スケソウ	N1/2E56M	14	33
同	17:10	17:40		1番	23	メス	トタン系		N1/2E30M	14	34
同	この日このほかに5頭追尾するも下長くレッコ(放棄)										
9月 8日	7:00	7:50	福岡	2番	26	メス(子モチ)	トタン系	スケソウ	NE1/2E55M	14	35
同	16:10	16:50		1番	17	オス			能取NNW8M	13	36
9月16日	9:00	9:20	福岡	1番	20	メス	トタン系	スケソウ(古)	NE55M	14	37
同	10:45	12:00	(共同)	1番	18	オス	トタン系			14	38
9月22日	10:30	11:20	(三好・共同)	1番	23	オス		スケソウ(古)	NEN	14	39
10月 4日	11:20	11:26	福岡	2番	22	オス	トタン系		網走NE48M	12.5	40
10月 8日	12:00	13:45		2番	34(16)	メス(子モチ)	植		ベギンSW8M	14.5	41
10月 9日	8:00	9:20		2番	34	オス	植		ベギンSW6M	14.5	42
10月16日	8:00	16:15		1番	12	メス(子モチ)			ベギンS6M	14	43
10月19日	6:00	7:50		2番	32	オス			ベギンS12M	14	44
同		9:10		1番	36	オス					45
10月21日	13:55	14:00	久保田	2番	24	メス	トタン系	スケソウ(新古)	網走NNE32M	10	46

表2 福岡昇三航海記録(1972年)

日 時	発見時刻	命中時刻	発見者	銚数	体 (尺)	性 別	種別	餌	捕獲場所	水温	No
4月 3日	7:10	7:20	徳丸	1番	21	メス	トタン系	アミ	能取NW 3/4W 21M	0	1
4月 7日	10:20	10:30	杉本	2番	24	メス(子モチ)	トタン系	アミ	ルシア沖	2	2
4月10日	10:40	10:45	徳丸	1番	21	メス		アミ	紋別NE 23M	1.5	3
4月22日		13:05		2番	24	メス	トタン系	アミ			4
	ボート使用 2時間 10分 不1										
4月23日	4:15 標津出港	13:30 標津入港	不1								
4月29日	9:50	10:40	福岡	1番	15	メス		アミ		3	5
	10:10よりボート使用ボート使用時間 30分										
5月 8日	5:15	7:20	福岡	1番	20	メス		アミ (新)		5	6
5月 9日	5:20	7:15	杉本	2番	24	メス	トタン系	アミ (新)		6.5	7
	13:15	15:30	新	2番	26	メス(子モチ)	トタン系	アミ (新)			8
	ボート使用 2時間										
5月13日	15:50	18:30	杉本	2番	28	メス	トタン系		能取N 35M	6.5	9
	16:00よりボート使用 使用時間 2時間 30分										
5月20日	6:10	6:15	福岡	1番	21	メス	トタン	助宗(スケソウ)	NW 1/2W 26M		10
5月23日	7:30	9:50	久	1番	25	メス	トタン	助宗(スケソウ)	能取NW /W 16M	5.5	11
5月25日	6:30	8:30	三好	2番	27	メス	トタン	コナゴ	SE /E 21M	8	12
	ボート使用 使用時間 2時間 10分										
	14:15	14:45	三好	1番	24	メス	トタン	アミ	羅臼NE /E 1/2E 8M	7.5	13
5月26日	5:30	6:10		1番	20	オス		アミ		9	14
					21	メス					15
	18:00 標津入港	ボート 2時間			20	メス					16
5月27日	5:20	6:30	三田	1番	21	メス	トタン	アミ		8.5	17
		9:00	三田		23	メス	トタン	アミ		8.5	18
5月31日	15:40	16:15	徳丸	1番	24	メス(子モチ)	トタン		羅臼灯台NE 6M	7	19
6月 1日	5:15	8:30	福岡	2番	23	メス	トタン	アミ		7.5	20
	ボート 3時間										
6月 4日	14:25	15:00							チップ沖		
6月 5日	3:20	7:30	福岡	2番	22	メス(子モチ)	トタン	アミ		10	21
	6:30よりボート使用 7:45まで使用 1時間 15分										
6月 6日	11:20	12:00	杉本	2番	21	メス	トタン	アミ		8	22
	12:30	13:40	杉本	1番	18				紋別NE 1/2E 30M	8	23
6月 8日	7:40	8:15	三好	2番	26	メス	トタン	アミ	紋別NE 30M	8.5	24
6月25日	6:30	8:30	(ボート使用)	2番	28	メス	トタン	アミ		11	25
	15:30	16:20	(ボート使用)	2番	29		トタン	アミ・コナゴ	SE /S 19M	11.5	26
6月30日	17:40	19:30	(ボート使用 不1)	2番	23	オス		コナゴ	北浜沖	13	27
7月 3日	6:15	6:50	(ボート使用)	1番	23	オス		コナゴ・アミ	SE /E 12M	13	28
7月 7日	6:40	6:50		1番	20	メス	トタン	アミ	紋別NE /E 60M	13	29
7月 8日	3:00 出港。8:00 F (霧) のため漂流。11:30 発航。12:40 発見。13:00 F のため見失う。すぐ漂流中発見										
	13:00	13:10		1番	15	オス	トタン	アミ	紋別N 1/2E 55M	13	30
7月12日	13:00	14:00	(ボート使用)	1番	18	オス		アミ		13	31
7月15日	3:50	8:00	(ボート使用)	1番	18				紋別N 50M		32
	14:00	16:00	(ボート使用)	1番	22						33
				1番	18						34
7月16日	8:20	8:40		1番	20						35
				1番	23				紋別N 1/2E 45M	15	36
			(ボート使用)	1番	18						37
7月26日	9:05	9:45		1番	13.5	メス		助宗(スケソウ)		12	38
	13:00 発見	追尾するも	15:00 命中するも	銚ぬけ	17:00 不命中	18:00 漂流	ボート使用 4時間		大黒島S/W 19M	14	
7月28日	12:40	12:45		1番	24	オス	トタン	サバ・ホッケ		13	39
7月29日	13:15	13:30		1番	24		トタン	サバ	大黒S/W 16M	13	40
7月30日	10:30	11:00		3番	25				大黒S/W 15M	13	41
	14:00	15:00				オス	トタン	サバ	大黒S/E 18M	14.5	42
	3頭めボート使用するも見失う 1時間										
7月31日	11:00	11:45			25	オス	トタン	サバ		12.5	43
8月 6日	11:40	12:00	福岡	2番	25	オス	トタン	スケソ	ルシア沖	15	44
8月 9日	17:40	17:55		2番	24	オス	トタン	サンマ・スケソ	NNE 28M	19.5	45
8月12日	3:30 紋別出港 9:00 発見するも見失う ボート使用 40分										
	13:00	13:45	久		25	メス	トタン	アミ		15	46
	13:20よりボート使用 13:45まで										
8月23日	4:00 発航 9:30 長須鯨発見親子 11:00よりボート使用 14:00 SE風強く見失う 16:05 ミンク発見 17:30 不命中 ミンク 2頭										
8月28日	13:00	14:40	(ボート使用)			シャチ 3頭			NE 50M		
9月15日	6:10	7:40	(ボート使用)	2番	26	メス(子モチ)	トタン	助宗(スケソウ)	NE 12M		
	9:00	10:15	福岡	2番	25	オス	トタン	助宗(スケソウ)	NEW 50M	17	47
	ボート使用										
9月21日	11:40	11:55		1番	17	オス		スケソ	N/E 1/2E 44M	13	49
9月22日	13:00	13:25	福岡	1番	23	オス	トタン	スケソ	N/E 3/4E 38M	13	50
9月23日	6:50	7:50	久	2番	26	メス	トタン	コナゴ	網走ESE 9M	15	51
	7:05よりボート使用										
10月 1日	15:30	16:25	(ボート使用)	2番	30	メス	トタン	コナゴ		15	52

翌年の昭和 47 年には、52 頭のうち、久保田さんが 0 回、杉本さんが 5 回、徳丸さんが 3 回、福岡さんが 8 回、三好さんが 3 回、三田さんが 2 回、久さんが 2 回、新さんが 1 回、「共同」と思われる無記入が 28 回となっている。

このことから、探鯨の機会は平等に設定されていること、その発見者も特別な者のみが偏って見つけているわけではないことがわかる。

次に、ノートにはクジラの発見時刻と命中時刻が記されているが、昭和 46 年には短くて 5 分ほどで仕留めるときと、長くて 8 時間 15 分かかったときがある。10 月 16 日が最長時間で、このときは子もちのメスであった。前田さんによると、網走の小型沿岸捕鯨船では、万が一、胎児をもったクジラを上げてしまったときは、酒 5 合くらいをかけてから、「また生き返って、クジラ捕らせろよ!」と言いながら、母体から胎児を切り離し、船尾から海へ流したという。カツオ一本釣り漁の漁船でマンボウやウミガメを上げて、解体した後に、マンボウの体やウミガメの甲羅を海に納めるとき<sup>(8)</sup>の作法や言葉の内容と同様であった。

昭和 47 年はボートを用いたオッカケが始まるわけであるが、不慣れなためか、当初はボートの使用時間が 2 時間 (5 月 9 日)、2 時間 30 分 (5 月 13 日)、2 時間 10 分 (5 月 25 日)、2 時間 (5 月 26 日)、3 時間 (6 月 1 日) など、この年は時間がかかっている。福岡さんが「発見して早くて 5 分、かかっても 15 分で仕留めることができるようになった」と語っているのは、後の時代のことであったと思われる。この年は最も早くて 5 分、最長時間はボート使用で 4 時間 10 分 (7 月 15 日) かかっている。

## 捕獲したクジラの種類と捕獲場所

捕獲したクジラそのものの情報は、体長 (尺)・性別・種別・餌などを記入している。一般的に網走に揚がるクジラはメスが多く、鮎川ではオスが多いといわれる。昭和 46 年には捕獲頭数 46 頭のうちオス 21 頭・メス 25 頭、昭和 47 年には捕獲頭数 52 頭のうちオス 13 頭・メス 29 頭・無記入 10 頭であり、この年は圧倒的にメスが多い。

クジラの種類については、オホーツク海では主にミンククジラとツチクジラとを捕獲した。さらに、それらの種類について分類されている民俗語彙が伝わっている。ミンククジラは「トタン系」と「カラス」が棲息していた。「トタン系」はトタン屋根のよう

にネズミ色で、外皮に斑模様のあるミンククジラのこと (写真 7)、「カラス」は黒色のミンククジラである。ツチクジラにはカラスツチ・アカツチ・ネズミツチなどがあり、カラスツチは黒色、アカツチは赤色、ネズミクジラは皮膚の色ではなく、大きさのことを形容しており、通常のツチクジラの頭よりも小さいクジ



写真7 外皮がトタンに似た、「トタン系」ミンククジラ  
(佐々木常生撮影)

ラを指すという。一覧表から見るとおり、ほとんどがミンククジラの「トタン系」を捕っており、昭和46年の漁期の終わりに「槌」（ツチクジラ）を2頭、捕獲している

福岡さんは解剖士も兼ねているために、クジラの胃の中も見ている。そのために何を餌にしているかも書き留めており、クジラの餌は今後の捕鯨の漁場を探す上でも重要な記録項目であった。昭和46・47年の兩年共に、漁期の前半は「アミ（オキアミ）」が多く、後半は「スケソウ（スケソウダラ）」が主となっている。イワシ・サバ・オオナゴを食べたクジラは別だが、スケソウダラを食べたクジラは、脂がのってなくて旨くないといわれている。

捕獲場所は、ある地点から方角とマイル数で表示している。使用されている基点は、紋別・能取岬（網走市）・網走・北浜（網走市）・知布泊（斜里町、ノートでは「チップ」）・ルシャ（斜里町、知床半島のオホーツク海側、ノートでは「ルシア」）・ペキンノ鼻（羅臼町、知床半島の根室海峡側、ノートでは「ペキン」）・大黒島（厚岸町）などである（図1）。大まかに「知床」と記入している場合もある。昭和46年は7月30日から、昭和47年は7月26日から、太平洋側の「大黒島」付近に回っている。ツチクジラの捕れたペキンノ鼻は、このクジラの集まるところだといわれる。

福岡さんは、漁場のシオメで測った水温も記入しているが、クジラの場合は5度くらいが理想とされている。なお、ノートには、シオ（潮）についての情報が記していないが、クジラも他の魚類と同様に、捕食するときはシオに向かって動くという。シオの流れに沿って移動しているときは、クジラの速度がはやく、捕鯨船やボートも追いつけなくなるといわれる。ただし、シオの方向や強さが具体的な操業自体に影響を与えることはなく、彼のノートには記されていない。

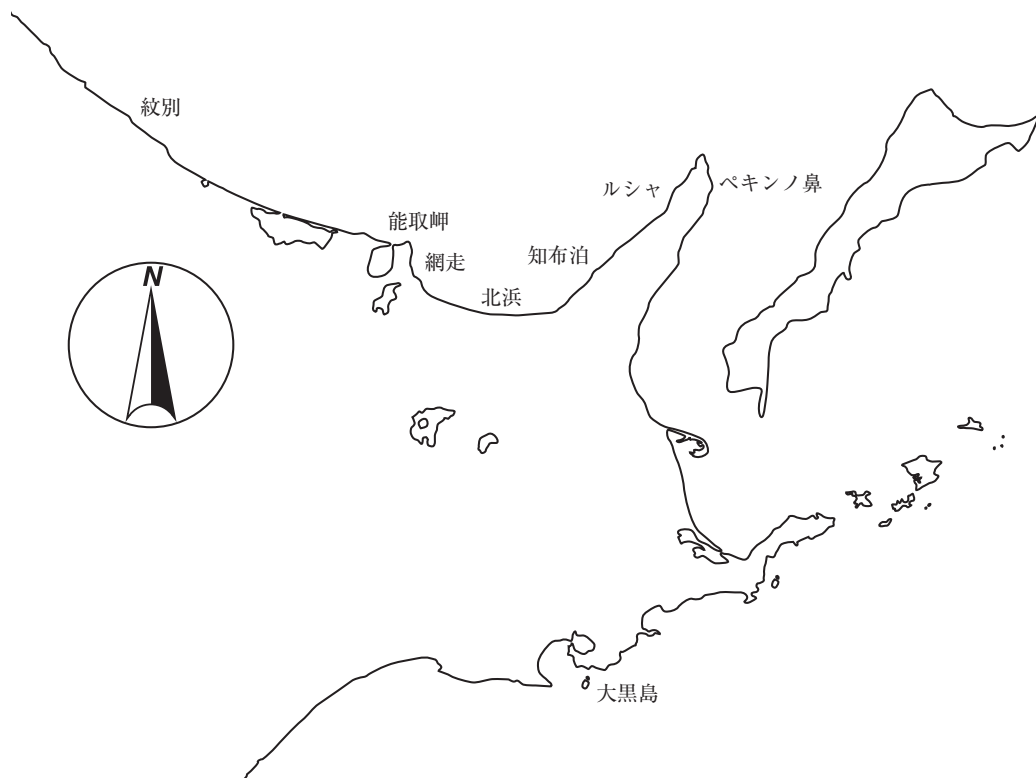


図1 クジラの捕獲場所の表記で目印にされた地点



## おわりに

以上、福岡昇三さんのノートをもとに、昭和46年と昭和47年の、小型沿岸捕鯨の実態をみてきたが、オッカケと呼ばれる新しい捕獲方法に変わる転換期であったことがわかる。そして、その捕獲方法は易々と定着していったのではなく、試行期間を繰り返していたことは、ボートによる追尾時間に相当費やしていることから理解された。

しかし、昭和62年に網走の小型沿岸捕鯨が終焉するときまで、オッカケというこの方法は用いられていた。オッカケという漁法は、深く潜り続けることができるツチクジラには適さず、ミンククジラのみにも適用されてきた。房総の和田はツチクジラ専門に捕獲したところである。また、紀州の太地はゴンドウクジラが主であり、群れる性質のあるゴンドウクジラは、多くの小型船で小湾へ追い込む漁には適していても、一隻のボートではクジラの群れを散らしてしまうだけである。一頭あるいは、たまに親子連れで出現するミンククジラのみが適しており、捕鯨船が撃ちやすいところに誘導するのが、その使命であった。つまり、カジキマグロなどの他の魚類を捕る漁法のように、その対象魚を直接的に捕るために追うのではなく、捕鯨船の手前に移動させるのが、この漁法の特徴でもある。おそらく、昭和46年からの鮎川と昭和47年からの網走のみに活用されてきたと思われる。昭和の末には多くの小型沿岸捕鯨自体が終焉を迎えるが、その後の調査捕鯨を兼ねた小型沿岸捕鯨の商業捕鯨には、オッカケが使用されることはなかった。網走では約15年の期間であった。

オッカケをする追尾士も、それ以前からミンククジラの性質を把握していた者だからこそ、すぐにも適応することができたものと思われる。太地のイサナ組合で行なっている、船の集団でクジラの群れを追うという集団対集団の追込み漁に対して、オッカケは個体対個体の追込み漁であり、その技能を開花して定着させてきた意義は大きいものと思われる。

さらに、その新しい漁法の定着においては、毎日の捕獲記録が必要とされ、追尾士である福岡昇三さんの手によって書かれた。クジラの発見時刻・命中時刻・発見者・銛数・クジラの体長・性別・種別・餌・捕獲場所・水温・漁期の捕獲順番などの項目を選定したのも、ミンククジラのことをよく知っていた福岡さん自身である。1972年にオッカケを導入したことで、24頭から30頭へと捕獲頭数が若干、増えているが、その他の項目に大きな変化は見られない。オッカケという漁法で、何とか以前のような捕獲頭数が得られることが分かった時点で、詳しく捕鯨記録を付ける必要がなくなったことも事実であった。福岡さんによると、昭和48（1973）年以降の捕獲情况等は、その漁場等も含めて、大きな変化はなかったといい、その2年間にわたる記録ノートの作成により、おおよその見当をつけて出港することが可能になったという。

## 註

(1)——竹内利美「鯨の町」『みちのくの村々』(雪書房、1969) 342-343 頁  
(2)——註1と同じ。337 頁  
(3)——川島秀一「小型沿岸捕鯨の民俗」『東北民俗』第41 輯(東北民俗の会、2009) 22-23 頁

(4)——菊地慶一『街にクジラがいた風景—オホーツクの捕鯨文化と庶民の暮らし』(2004、寿郎社) 79-82 頁  
(5)——2008 年7月7日、北海道網走市の前田三郎さん(昭和23年生まれ)より聞書。以下、文中に出てくる前田さんからの聞書は同年同日のみ。

---

(6)——2008年7月7日、北海道網走市の福岡昇三さん(昭和12年生まれ)より聞書。以下、文中に出てくる福岡さんからの聞書は、同年同日と2012年8月21～22日の再調査によるものである。

(7)——2008年5月12日、岩手県山田町大沢の元砲手、白土盛さん(昭和13年生まれ)より聞書。

(8)——川島秀一『カツオ漁』(2005、法政大学出版局) 168-207頁

(東北大学災害科学国際研究所、国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2013年3月25日受付、2013年7月30日審査終了)